



死んだ大地が息を吹き返す。

大地に水が流れ、木々が茂りだす。

隠れていた虫たちも地面から顔を出し、

地面を踏みしめ、人が、街が、動きだす。

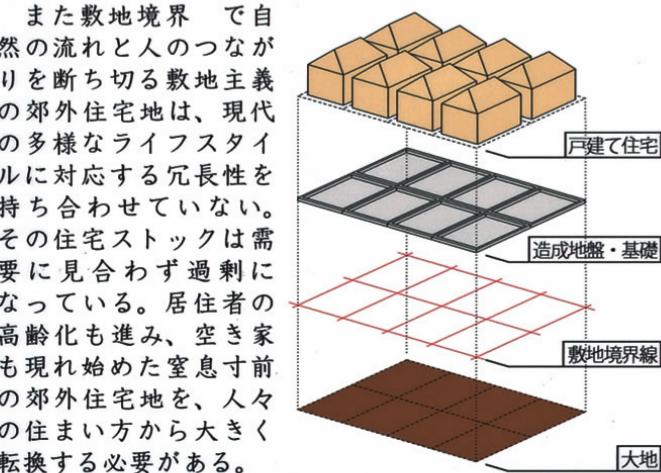
大地が深い呼吸を取り戻すとき、そこはあらゆる生命が生きる舞台に変わり始める。



敷地主義の暮らし方の限界

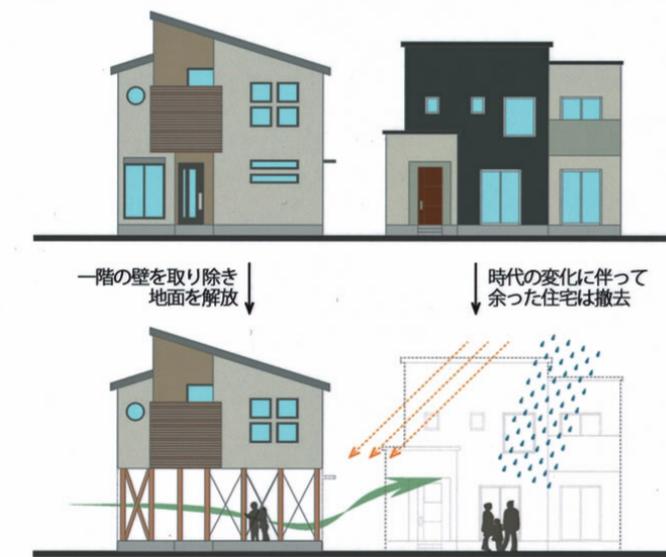


高度経済成長期には都市郊外の各地で大地が切り開かれ、もとは森や林だった場所が大量の住宅で埋め尽くされた。同時に地面は住居とアスファルトによって蓋をされ、人と大地の交わりも断たれてしまった。



また敷地境界で自然の流れと人のつながりを遮断する敷地主義の郊外住宅地は、現代の多様なライフスタイルに対応する冗長性を持ち合わせていない。その住宅ストックは需要に見合はず過剰になっている。居住者の高齢化も進み、空き家も現れ始めた室息寸前の郊外住宅地を、人々の住まい方から大きく転換する必要がある。

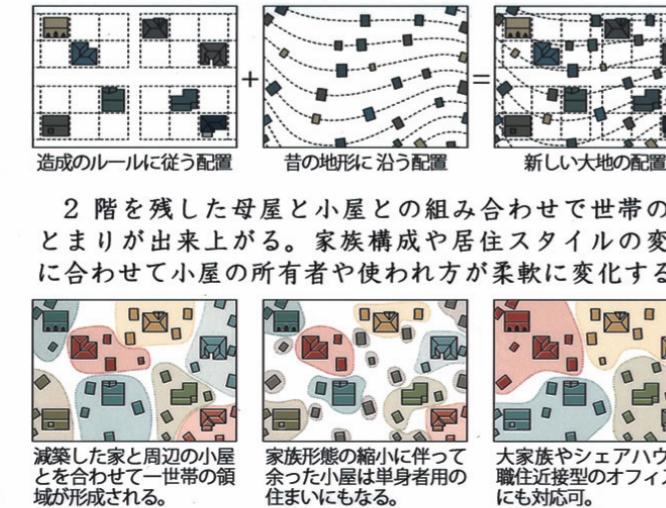
家の解体と大地の解放



過剰に余った住宅を解体する。居住に必要な最小限の機能を残し、地面に接する一部は壁を取り除くことで外部空間として大地に解放する。また、居住人口に合わせて不要のない住宅は撤去する。その後居住者には区切られた敷地ではなく、床面積を基準とした居住スペースが確保される。大地とその上に立つ住宅との間に隙間が生まれ、大地は自由になる。

柔らかく住まう方法

住宅の解体によって足りなくなった居住スペースは、囲に小屋を配置することで補う。宅地造成前の自然の地形に沿うように一階部分を浮かせた小屋を配置するし、造成でかき消されたもとの大地の記憶を取り戻す。



大地が息を吹き返すまで

Phase 1



Phase 2



Phase 3



大地を介してつながる自然・人・街





